

日本人のみた外国 「首振り」のニュアンス -- インドのジェスチャー（カルチャー・ショック）

著者	佐藤 創
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	158
ページ	47-47
発行年	2008-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004895

「首振り」のニュアンスーインドのジェスチャー

佐藤 創

比較的よく知られているかもしれないが、インドでは、相手の問いかけを肯定する場合に「うなづく」のではなく、微妙に首とつか頭を振り子のように揺する。この動きを言葉で描写するのはなかなか難しい。それでもあえて説明すれば、顔は正面を向けたまま首を固定し、肩の方向に、側頭部を右下左下と二〇度くらい交互にかしげ、その動作を一秒に一セットから三セット行う。とりあえずこの動作をここでは「首振り」と呼ぼう。この首振り、大仰に頭を傾け加速して行なうならば、初期のビートルズが歌いながら頭を振りまわしているような感じになる。ただし、彼らがインドのアシラムに滞在したのは後期に入ってからのことなので、この首振りをインドで会得した、というわけではなさそうである。

ところで、この首振りジェスチャーは、イエス、という意味のみを表すわけではないようだ。実験に基づくわたしの大胆な仮説を開陳してみよう。この新仮説によれば、首振り動作はもう少し広い文脈で使えはるはずなのである。

コルカタ郊外ヘインタビューに行った帰り、空腹にさいなまれて、薄汚れた感じの商店に足を踏み入れた。そこで、スナックやミネラルウォーターを買おうとしたところ、

ろ、店番をしていた若い青年には英語が通じなかった。わたしもベンガル語はできず、仕方がないので、またぼられるか、と、あきらめて、いくらなんでも一〇〇ルピー（およそ三〇〇円）はこえないだろうと、一〇〇ルピー紙幣を渡したところ、彼は、おそろくまったく正確に、たしか二〇ルピー紙幣三枚に加えてコインをいくつか、おつりとして返してよこしたのである。

この対応に嬉しくなつて、「青年、君はいいやつだ」という気持ちを伝えたかったのだが、どうしてよいかわからない。そこで、ちよつとひらめいて、例の首振り動作を試してみたところ、その青年も、同じように首を振り子のように揺すって返してきた！ さらにもう一度、今度はややほえみながら首振りを繰り返したところ、むこうも微妙に明るい顔で、首振りをかえしてきたのである。

記してみるとたいしたことない出来事だが、そのときは心が通い合ったような爽快な気持ちになったことを覚えている。恋人同士の仕事が似てくることをシンクロニー現象と呼ぶそうだが、薄暗い店のなか、無言で首を振り合う二人の間にあるものもまた、愛、であらうか。

この出来事をほほえましい記憶として反

芻しているうちに、一つの仮説がひらめいた。インド亜大陸がユーラシア大陸に衝突してヒマラヤ山脈が隆起したという仮説ほどの雄大さはないにしても、インド人は数学が得意という仮説よりも実用性があるだろうと自負している。その仮説とは、この首振り動作で少なくとも三つのニュアンスを表現できる、というものである。第一はもちろん肯定、Yes や OK、美味しい、というような意味。そのほかに、第二のニュアンスとしてアリガトウ、第三にドウイタシマシテ、である。ただし、日本の「うなづく」動作も同じようなニュアンスの外延を持つているかもしれないので、さして新しい仮説ではないかもしれないですね。

それはさておき、この首振りジェスチャー、慣れると便利なので南アジアの人たちと意思疎通するときに頻繁に使っている。ただし、頭の揺すり方が悪いのか、仮説が間違っているのか、通じないこともあり、私の首振りニュアンスの探求は今なお続いて、あちらこちらで試している。勢い余つて日本人相手に使ってしまったときには、肩こりをほぐすふりをしたりしてごまかしている。

（さとう はじめ／アジア経済研究所
開発研究センター）